http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.272　13/10/22

散らかった机のアナタ

朝日新聞『GLOBE』10月20日版より。

＊

整理整頓が行きとどいた環境に置かれれば、だらしない性格の人の品行があらたまるのか、という問題については長く結論が出なかった。これに取り組んだのがミネソタ大学の研究者たちだ。実験結果は細菌、「サイコロジカル・サイエンス」電子版に発表された。

研究者たちは大学生のグループを二つに分け、一方は整理整頓が行きとどいた部屋に、もう一方は紙くずなどのゴミが散らかった部屋に入れた。学生には部屋のなかで、実験と関係のない内容のアンケートに答えさせる。10分後、学生たちに立ち去ったよいと告げ、退室の際、リンゴかチョコレートバーのどちらかを選んで受け取っていい、と伝えた。すると、きれいな部屋で過ごした学生の方は、汚い部屋の学生に比べ、より健康的な「リンゴ」を選ぶ確率が２倍に達したという。

しかし、次の実験では、足の踏み場がないような場所で働くことにもいくばくかの利点があることも明らかになった。きれいな部屋と汚い部屋に学生を分けて入れるのは同じだが、今度は「ピンポン球の新しい利用法を考えよ」という課題を与えた。そして、中立的な第三者が、その回答の独創性について審査した。

すると、書類がきちんと整頓された机でまじめに課題に取り組んだ学生よりも、乱雑きわまりない部屋に入れられた学生の方が、明らかに創造性あふれるピンポン球の使い方を編み出したという。

「この結果には驚いた」。行動科学の専門家で、研究チームを率いるミネソタ大のカスリーン・ボースはそう話す。これまで、しっちゃかめっちゃかな状態にも結構いい面がある、などと指摘した研究はほとんどなかった。何十年か前には、「割れ窓理論」が提唱された。この理論によると、建物の窓ガラスが割れている、といったちょっとした無秩序状態でさえ、放置しておくとたいへんなことになってしまう。管理が行きとどいていないことを誰もが当たり前のように思うようになり、人々の規律は緩み、ニヒリズムがまんえんしていく。

だが、ボースの研究結果によれば、散らかり放題の職場は独創性をはぐくみ、何か新しいことを見つけようという探究心に火をつける、ということになる。ボースはこんな実験も試みた。実験の参加者に対し、昼食の飲み物として配るスムージーに、健康にいい添加物を加えることを告げる。参加者は「新しい」添加物か、「伝統的な」添加物かのどちらかを選択することができる。

ボースによれば、汚い部屋のグループの方が、はるかに「新しい」を選ぶ傾向が強かった。整頓された部屋のグループは、「伝統的な」を選ぶのが一般的だったという。

ボースや共同研究者らは「ごちゃごちゃした環境の方が、人々に伝統の殻を打ち破る力を与えるようだ」と結論づけている。「その力がこれまでになかったような洞察のみなもとになる」という。（後略）

＊

結構ツッコミ所のある報告だが、それなりに面白い。心理学分野志望の人、どう思う？